

抗アミロイド抗体薬治療を踏まえた認知症の人の介護家族等への支援の実態調査研究
研究分担者 藤田医科大学・医学部 武地 一

研究要旨

アルツハイマー病に対する疾患修飾療法（DMT）は、早期の段階からの認知症治療を行うようにパラダイムシフトを起こしている。認知症カフェは早期段階の認知症の人やその家族、地域住民が情報交換などを行う場所として全国に普及しているが、DMTの情報が認知症カフェに集う人々などに十分に伝わっているか、不明な点が多い。そこで認知症カフェ運営と抗アミロイドβ抗体治療の両方を経験している立場から実態調査を行うことを計画し、調査項目について検討を行っている。

A. 研究目的

アルツハイマー病に対する疾患修飾療法（DMT）の導入および認知症の前段階としての軽度認知障害の理解は地域住民や認知機能障害を呈する本人や家族に十分に行き渡っているとは言えない状況にあると考えられる。そこで、これまでに認知症カフェの運営や認知症カフェ運営の全国調査を行ってきた立場と大学病院でDMTの治療の経験を踏まえ、認知症カフェに集う人々への調査項目を検討する。

B. 研究方法

認知症カフェの運営者に対する過去のアンケート調査結果を分析し、認知症カフェに集う人々の状況を把握する。一方で大学病院の外来に通院しDMTの治療を受ける人々についての実態調査も行い、両者に共通したニーズを検討する。

（倫理面への配慮）

本研究のうち認知症カフェの実態については既存データの二次利用による調査であり、人を対象とする研究ではなく、個人情報も取り扱わない。一方、大学病院でのDMT治療対象者の受診状況については藤田医科大学倫理委員会の承認を得て調査を行った。

C. 研究結果

過去に行った認知症カフェの全国調査では、2728か所のうち1477カフェから回答を得た（J Am Med Dir Assoc. 2019）。1か月に1回開催しているカフェが64.8%と最も多く、運営時間は2時間が53.8%と最も多かった。認知症カフェに来店する人のうち認知症の重症度を尋ねた結果、認知症疑いもしくは軽度認知障害（MCI）が32.6%、軽度から中等度認知症が35.1%で、比較的早期の段階の認知症の人が来店することが示されていた。認知症もしくは認知機能低下の疑いの来店者とはほぼ同数の認知症の人の家族、地域住民の来店があった。その点ではDMTの情報を提供するのに適した場所であることが確認された。一方、藤田医科大学病院のもの忘れ外来を受診した患者の基礎調査を行った結果、2024年1月から2025年7月までに565人の受診者があり、MMSEの平

均値は22、CDR全般スコアの平均値は0.8で、DMT治療の潜在対象者は多数おられることが分かった。しかし、この受診者には精神症状が強い場合やそれと関連して介護負担感が重い場合があり、その場合にはDMTの対象にはなりにくいことも示された（論文投稿中）。

D. 考察

認知症カフェに集う人々にはアルツハイマー病の初期段階の人やその懸念を持っている人が一定数参加されており、DMTの情報提供を行ったり、DMTに対する思いを聞き取るのに適した場所であることが確認された。大学病院のもの忘れ外来にも多数のDMT対象者が受診されているが、精神症状などでDMTの対象にならない場合も多い傾向が見られた。

E. 結論

認知症カフェ等を通じてDMTに対する情報提供の必要性やアルツハイマー病についての思いを調査することはDMT治療を行う病院とのミスマッチを防ぎ、適切なDMTの普及を促進する効果があると思われる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし